

書評・紹介

福島光哉著

『宋代天台浄土教の研究』

新田雅章

いわゆる趙宋天台に関する研究の成果は決して少ないとはいえない。しかしそのなかでの浄土教をめぐる研究となると、その成果は必ずしも多くはない。とりわけその時代における浄土思想の展開の跡をトータルに視野のなかに収めて進められるような研究は、正直なところなされていらない、というのが現状である。天台学となれば、研究者の関心はまず天台大師智顛に注がれやすい。それから六祖湛然に向けられたり、また南岳慧思をはじめとする先行の諸師、乃至諸思想に注がれたり、そして趙宋天台が対象とされる場合でも、それら先達が教示したいいわゆる天台思想の核心をなすと見做される問題、すなわち「諸法の実相」の問題とか「止観」に関する問題をめぐって、そこでいかなる論究がなされてきたのかといったことが問われるのが、いわば自然の成り行きである。研究者の間でこうした研究姿勢が定着してしまうと、趙宋天台の浄土思想に光を当て、その

全貌の解明に努めようとする努力も生まれにくい。ただし天台思想の展開の歴史を眺めつつ、趙宋天台の全体を

把握しきろうとすれば、このような研究姿勢を保持するだけでは十分とはいえない。趙宋天台の展開の過程を見てみると、そこには浄土系統の思想をめぐる思索の高まりの跡を見てとることができる。この領域に考察のメスを入れなければ、趙宋天台の全体を捉え切ったとは、とうていいいえないのである。天台学派が育て上げた浄土思想は、智顛作とされてはいても、実際にはかれに仮託されたにすぎない著述——『浄土十疑論』および『観無量寿経疏』の両著の内容を消化し、そしてそれを独自に発展させて成立するにいたった思想であって、もともと智顛の思想と無縁なものといつてよい思想にはかならない。そのかぎりににおいて顧みられずともよいと考えられるかもしれないが、しかしそうした見方はあまりに近視眼的で、一方的すぎる。趙宋天台の学徒においてもこれら両著は智顛の著述と確信されていたわけであり、従ってかれらはそれら両著と真摯に対面し、それらに導かれ、浄土思想に関するそれぞれの思索を深めていったのである。天台学派のなかでの浄土思想をめぐる思索がこうした事情のもと進行していったことを考えれば、たとえ『浄土十疑論』『観無量寿経疏』が智顛の著述でないにしても、それらが表示する浄土思想に啓発されて構想される、天台学派の浄土思想Ⅱ天台浄土教の全貌の解明に努めることは、きわめて意味のあることである。というより、取り組まれねばならない重要な課題といつてよい。

さてこのほど、われわれは天台学分野でその考察の深まりがのぞまれる浄土思想についての研究領域に直接切り込んだ労

作に接する好機に恵まれた。福島教授が世に送られた『宋代天台浄土教の研究』がそれである。本書は趙宋天台の複雑に流れる思想の展開の過程の全体を見渡した著述であるばかりか、教授が大谷大学において文学博士の学位を取得された折の学位請求論文を出版されたものであり、それだけにきわめて意味深い著述である。

本書の構成を示すことから始めよう。まずはじめに序論、これは本論へと導くいわゆる導入部である。つづいて本論であるが、八章より成る。そのあと結論がつづき、ここで本書の主題の究明が終わるのであるが、結論のあとさらに付篇として二篇の論文が付されている。

以下各章の主題を示し、本書の内容への手引きとしよう。

まず序論。ここでの著者の狙いは、一つには、智顛が教え示した、四種三昧のなかの常行三昧としての「般舟三昧」および仏身論なかんずく阿弥陀仏の性格、それから浄土についての見解（＝四種浄土説）が、その後の天台浄土教の展開の歴史のなかでどのように理解され、扱われていくことになるのかをあらかじめ見通しておこう、ということである。これら三点の事項はいずれも内容的に浄土思想と深く絡む事柄であってみれば、確認しておくことはこれからの論究をいっそう明白なものとするであろう。

つぎの確認は『浄土十疑論』と『観無量寿経疏』の内容についてである。趙宋天台の時代における浄土思想への関心の高ま

りは、著述でいえばこれら両書に負うところ大なるものがあつたわけであり、従つてこれら両書の内容を見極めておこう、というわけである。これら両書は内容的に非常に異なっている。前者は曇鸞・善導系の浄土思想の影響のもと著された著述であり、天台教学の匂いをあまり感じさせない著述であるのたいして、後者は『観無量寿経』にいう念仏が『法華経』や『維摩経』などが教示するいわゆる天台の円頓止観と内容的に同じ境地を切り拓く三昧であるとの了解を背後にもつて著された著述であつて、天台教学の特徴を色濃くにじませた著述である。こうした両書の内容上の相違から、趙宋天台の学僧たちがこれらのいずれに思想的な親近感を抱くかによつて、その浄土思想にちがいが生ずることになるわけで、従つてのちのちの趙宋天台の思想的展開の流れをいっそう明白にせんがために、これら両書の確認が行われるのである。

第三の確認は永明延寿の浄土思想に向けられる。五代の時代、復興の兆しがみえはじめた天台宗において浄土教への関心も高まりはじめるのであるが、そのとき注目されたのが延寿の浄土思想であつた。こうした事情があるために、著者はここでかれの思想の特徴を見極めておこうと試みるわけである。

趙宋時代の天台宗における浄土思想の展開を準備するいわば思想的土台を以上の三点に絞り、この面の確認を行った上で、いよいよ本論の論述へと移るのである。

本論の第一章は、そのタイトル——「山外派の浄土思想」が示すように、山外派のなかで形成された浄土思想の究明を主題

とする章である。まずはじめに、浄土思想もそれを背景として説示されるにいたる山外派の止観の思想の一般的な特徴の確認が行われる。ここで取り上げられるのは源清の見解である。天台思想のもとでは止観の方法の基本は「観心」として了解されるべきものとみられていても、当の心を、把握されるべき諸法の実相との関連から眺めてみて、どのようなものとして認定、理解するのかといった問題をめぐって、山外派は智顛の思想に必ずしも合致しない、いささか特異な見解をもちあわせている。「心」と「諸法」との関係をめぐるその理解は、実は実相観の上にも反映することになる。さらに重要なことに、この心と実相についての理解が山外派の浄土思想の性格をも決定づける、ということにもなっているのである。こうしたわけで著者は源清の思想を手掛かりとして山外派の止観の思想の基本的性格をまず見とけておこうと試みるわけである。この試みはこのあとにつづく論述の理解に当って道筋を与えてくれて、意味のある作業である。

このあと智円の浄土思想の究明がつづく。前段において確認した山外派の思想的特徴を踏まえて構築された浄土思想であることが示されるとともに、さらに山外派の浄土思想の基本的性格そのものが明らかにされる。

第二章は、その章のタイトル——「知礼の念仏論」が示すように、山家派の中心的位置に立つ知礼の浄土思想の解明に当てられる。

かれの浄土思想といっても天台思想の基本からかけ離れたも

のでももちろんなく、従ってまずはじめに天台の止観の思想の基本構造が概観される。そしてこれを受けて、智顛の思想の正統の継承者としての知礼の思想的立場の確認が、かれが教示する妄心観、事理二観の雙修の主張、約心観心論などの諸説を手掛かりとして進められる。

このあと、本章の中心テーマである知礼の浄土思想の特質が明らかにされてゆく。かれの浄土思想は天台の止観の思想に深く根差すものであること、少しく内容に立ち入ってのべれば、念仏は事相の念仏であってはならず、あくまでも理観の念仏でなければならぬ、すなわち「観無量寿経」に説かれる十六観は、円教の止観の場合とまったく同様に、一心三観を能観の法、一境三諦・一念三千を所観として成り立つ理観であり、それゆえ阿弥陀仏も、またその世界も客観的な実在と考えられるべきではなく、まさに衆生の心と一体の関係にあるものとみられるべきである。こうした内容の事柄が整理してのべられ、知礼の浄土思想の基本が詳述される。

第三章は「遵式の浄土思想」である。ここでは、知礼の学友でもあり、同じ山家派の学僧、遵式の浄土思想の性格が論究される。念仏の基本を理観にみる知礼とは異なり、罪障の滅除を実現するものとしての懺法につよい関心を示し、かつ称名念仏を重視するといったいわゆる思想の事的な側面に比重を置いてその教法を構想したのが遵式であり、この点でかれの浄土思想は知礼とちがった局面を切り拓いたものであることが、縷々説き示される。もちろんだからといってかれの浄土思想が天台の

根本の思想と無縁なものというのではない。一念三千や十界互具の思想と関係づけて己身弥陀・唯心浄土を主張する、まさに天台浄土教と呼んでおかしくない思想であることが、明らかにされる。なおかれが懺法なり口称念仏に関心を示すようになった思想的理由として、人間在存の罪悪性についての鋭い自覚があったことが指摘されている点もべておかねばならない。

第四章は「神照本如系の浄土教」である。ここでは遵式以後の天台浄土教のいわゆる思想模様の究明が主題とされる。四明知礼のあと、天台の教学は「四明の三家」と呼ばれる人たちによつて継承されてゆくのであるが、浄土思想に関心を示したのは、そのうちの神照本如、そしてかれの流れを汲む人びとであったこと、それから本如系の人びとが継承したのは、知礼の浄土学ではなく遵式の浄土思想であったこと、また遵式の思想を継承しつつ、かれらの間でどのような浄土思想が構想されるにいたつたのかといった問題、こうした事柄が明らかにされる。

第五章「禪宗系浄土教と天台の関係」。知礼、遵式のあと、禪宗に心を寄せながらも、天台浄土教に関心を示すなん人も在俗の信仰者が現れてくる。この章では、この系統の人びとの浄土思想の特徴が明らかにされる。禪の思想と浄土思想とは思想構造を同じくするものではない。禪の立場を保ちつつ浄土思想に接近すれば、思想的にみて、阿弥陀仏が、また浄土が、それから往生ということが当然問題になるはずである。禪宗系浄土教のもとでこれらの問題がどのように解決され、いかなる浄土思想が形成されてくるのかといったことが詳述される。

第六章は「在家信仰と天台浄土教」である。十一、二世紀ごろの天台浄土教をとりまく状況は、遵式や本如系の諸師たちの活動に加えて、他の法系の人たちの活動もあつて、僧俗の信奉者の数を次第に増大させつつある、というものであつた。この傾向がその後さらにつよめられるなかで、注目すべきことに在家の信奉者のなかから天台浄土教を独自の見方に立つて見直そうとする動きが生まれてくる。それは天台思想の基本に立ち返つて天台浄土教を見直そうとするスケールの大きな試みであつた。著者は在俗の信奉者が構想する独自の見解を鮮やかに描き出してみせてくれる。

第七章「元照の天台浄土教批判」。『観無量寿経』の解釈を論拠として提起される天台浄土教についての元照の批判の構造を論究した章がこの七章である。元照の『観経』解釈の基本姿勢、そこから導き出される観法観、さらには阿弥陀仏の仏身・仏土についての見解、元照の思想をこれらの側面から整理し、そしてそれぞれの点から知礼に象徴される天台浄土教の思想との異同を、著者は明らかにしてみせてくれる。

本論の最終章が第八章「知礼浄土学の復興」である。十一世紀後半から十二世紀の初頭にかけて天台浄土教は活況を呈することになるが、この時代のそれは、思想的にみて、遵式による浄土思想の開陳に端を発する系統のものであり、迺れば「浄土十疑論」の思想に繋がる性格のものであつた。こうした傾向の浄土思想が隆盛をみるにいたつた結果、知礼の浄土思想はもとより天台教学そのものも顧られないという状況が現出するに

たつた。しかし十二世紀中葉以降、状況は大きく変化し、天台の基本思想の研鑽に意味を見出す思想的雰囲気醸成されてくる。かくてここに知礼浄土学への回帰とそれに導かれた新たな浄土思想の形成への動きが現実化してくる。著者はそこに提示される新たな天台浄土思想を丹念に描いてみせてくれる。

本論はこれで終わるわけであるが、このあと付篇として二篇の論文が付されている。タイトルだけを紹介することにしよう。「智顛の念仏三昧論」と「智顛の般舟三昧」、以上の二篇である。

複雑な展開の経過を辿る趙宋時代の天台浄土教の全貌を明らかにしてみせた著述であるだけに、そこでの著者の問題設定なり狙いとされる主題を的確に取り出したかどうか、正直なところ不安なしとしない。見当ちがいのすべては筆者の読み取りのまずさゆえとはつきりとのべておこう。錯綜した問題が扱われる本書の内容を考えると、筆者はその紹介の任にあらず、の思いをつよめるばかりであるが、筆を擱くにあたり、読後感を一、二付言することをお許しただくことにしよう。

一つは、天台浄土教を研究対象とするとき、天台浄土教として独立した領域を画しうるのか、という問題をめぐっての漠然とした疑問である。知礼の浄土学は天台教学にはつきり裏打ちされているという点で、天台浄土教としての確固とした独立の思想的領域を保有することになるけれども、知礼から距離をもった思想は、そこから離れば離れるほど、天台教学としての

色合いを薄め、逆に種々の夾雑物を含むことになりやすい。

『浄土十疑論』に繋がって自らの浄土思想の構築を模索する思想的立場は、『浄土十疑論』自体天台的でない分、他の系統の思想を内に取り込む思想的いとなみを許す立場とみられてよいであろう。まして『十疑論』が善導的要素を内包する作品であつてみれば、これに従った思索の歩みのなかにいわゆる善導的なるものが混入してきてもならおかしくない。『浄土十疑論』に従った思索の方向と曇鸞・善導の系統との間の思想的垣根は決して高くないであろう。このように考えてみると、中国の浄土思想の展開の跡を辿ろうとすれば、関連の思想の全体をトータルにみる眼が求められているように思えてくる。もちろん筆者のこうした思いもこの労作のまえではなんの意味ももたえない。錯綜した過程を辿る天台浄土教の展開の歴史が、著者の慧眼によつて見事に整理されたわけで、このことはなにもにも替えがたい。

もう一つ、これは本書の内容とまったく関係のない事柄であるが、天台学が絡む場面ということで、場ちがいと承知のうえでのべることを許していただくことにしよう。のべておきたいと考える事柄は、知礼が主張するように、天台智顛の思想の根本は「性具」（また「具」）を教示する点にある、とみてよいのか、という問題である。換言すれば、智顛がいう「諸法の実相」とは「一念に三千の法が具足されている」というありようのことであるとか、あるいはまた「理具三千」「事造三千」という表現で示されることと理解してよいのか、ということであ

る。知礼のこうした解釈には問題があるように思われてならず、問題提起の意味からあえて記すことにした。なお「諸法の実相」をめぐる知礼のこうした解釈が成立しなくとも、「具」の

思想を基本に据えて説示されるかれの浄土思想それ自体は、その論理的基盤をなんら弱めるものではない。